

7-3 (21)

リンパ系腫瘍症例における血清中の免疫調節関連サイトカインの検討

井原寛子¹、室橋郁生¹、若尾大輔²、吉田勝彦²、中村裕一²、陣内逸郎²、別所正美²

埼玉県立大学短期大学部衛生技術学科¹、埼玉医科大学第一内科²

【目的】リンパ系腫瘍では増殖関連サイトカインの異常調節機構が存在する。一方、樹状細胞は比較的機能が保持されている。しかし、これらの樹状細胞の機能は IL-6、VEGF、TGF- β_1 、IL-10 により阻止されることが明らかにされている。リンパ系腫瘍症例において血清中のこれらのサイトカイン濃度を測定し、相互の関連性を検討した。【方法】多発性骨髄腫(MM) (7 例)、マクログロブリン血症(MG) (2 例)、非ホジキンリンパ腫(NHL) (21 例)、ホジキン病(HD) (3 例)、急性リンパ性白血病(ALL) (9 例)、計 42 例および正常例 10 例を対象とした。血清サイトカイン濃度は ELISA 法にて測定した。病期、CRP、LDH、予後に関係するその他の因子との関連も検討した。【結果】IL-6、VEGF、TGF- β_1 、IL-10 は 41 (98%)、19 (45%)、14 (33%)、27 (64%) 例で増加を示した。疾患別のサイトカインの増加頻度は、MM: IL-6 (100%)、TGF- β_1 (43%)、NHL: IL-6 (95%)、IL-10 (67%)、VEGF (52%)、ALL: IL-6 (100%)、IL-10 (89%)、VEGF (44%) であった。IL-6 は HGF ($r=0.550$, $t=4.166$)、CRP ($r=0.529$, $t=3.940$) とのみ有意な正の相関を示し、VEGF、IL-10、LDH、ICAM-1 などと相関を認めなかった。VEGF、TGF- β_1 は他のいずれとも相関がなかった。【考察】IL-6 は MM 他、多くのリンパ系腫瘍症例において高頻度で増加を示し、樹状細胞を介して免疫能抑制に関与している可能性が示唆された。また、IL-10 は多くの因子と正の相関を示したが、IL-6 は HGF、CRP の 2 因子とのみ相関することが示された。